

2 大学の被災状況



本学の被災状況 [人的被害]

震災時に大学内にいた教職員・学生

当時学内には200人程度の学生と教職員がおり、理工学部では実験を行っていた学生・教員も多かった。しかし、地震による建物の倒壊や脱出を妨げるような備品の転倒はなく、天井の落下や壁の剥落などもごく一部であり、火災の発生もなかったため、全員無事に避難を完了した。海岸線から遠く避難時間に余裕のあったこと、そして結果として学内まで津波が到達することがなかったことが幸いしたと言える。また、避難生活が長期に渡ったが、その中で体調を崩す者やパニックを起こす者などは少なかった。出勤状況を把握している教職員はともかく、サークル活動で登校している学生の実数を把握することは非常に困難であったが、幸いにして多くの学生が研究室、あるいはサークル単位で集団行動をしていたため安否確認が可能だった。ただし、2号館の備品倉庫で一人で作業中の教員もおり、物品を満載した小部屋で出口を閉ざされ孤立する危険と紙一重だったというケースも報告されている。

学外にいた教職員・学生

学生の被災状況、安否確認は学生支援係が担当したが、通信手段の断絶、そして学生や教職員の現住所、帰省先、電話番号等の紙媒体のデータがなかったため、困難を極めた。

3月30日までに最終的にまとめられた学生の死亡者数は23年度入学予定者を含めて7人であった。惨禍を被った地域ごとの在校生の内訳は、仙台市若林区2

人、陸前高田市1人、女川町1人、南三陸町1人、東松島市1人であり、いずれも帰省先で津波によって被災した(入学予定者の1人は石巻市内で被災した)。これだけの大きな災害にもかかわらず、石巻市内で津波によって死亡した在学学生はいなかった。津波に巻き込まれ怪我を負ったり、被災した仙石線車内で難を逃れた者もいた。また、不幸にして家計支持者を亡くした学生は4人にのぼった。大津波により心的外傷後のストレス障害(PTSD)の症状を示した学生も数人報告され、その後カウンセリング等でケアをおこなっている。

学外にいた教員・職員には死亡者はなかったが、多賀城市内で津波に自動車ごと流された山本憲一教授など九死に一生を得た例や、家族を亡くした職員が4人いることが報告されている。自宅を失った教職員学生も多数に及んだ。

① 学生の被災状況

学生数	死亡者数	備考
1,941人	7人	死亡者に入学予定者1人を含む。

② 教職員の被災状況

教員数	死亡者数	備考
158人	0人	全員無事(専任教員95人、非常勤教員63人)

職員数	死亡者数	備考
51人	0人	全員無事(専任30人、嘱託・雇員17人、非常勤嘱託4人)

被災者修学支援

石巻専修大学では被災した学生が修学を続けられるよう被災者修学支援を行っている。平成24年1月31日までに報告されている学生の修学支援状況は次の通りである。

ストレスマネジメントに関するアンケート調査結果(暫定)

学生部委員会、学生相談室

大地震、それに伴う津波は、死ぬかもしれないというトラウマ、大切な人が亡くなるという喪失感、避難所や仮設住宅での生活ストレスという3つの強いストレス(災害ストレス)を与える。

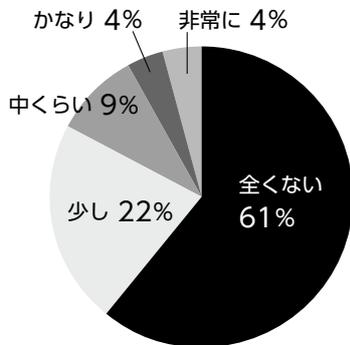
さらに今回の東日本大震災では、原発事故による放射能への恐怖や不安、避難先から自宅へ帰ることのできない焦燥感などがあると考えられる。

それらの出来事(ストレッサー)に対し、人はそれぞれの心身反応(ストレス反応)が引き起こされる。この災害ストレスをマネジメントするためには、心身対応への受け止め方や適切な対処を学ぶことが必要となってくる。

そのため、まずはトラウマについて、全学部・全研究科の学生・院生に対して、平成23年9月29日から11月11日まで本人のストレスマネジメントに関するアンケート調査を行い、約3分の1にあたる601人のデータを得た。その結果(暫定)を以下に円グラフで示す。

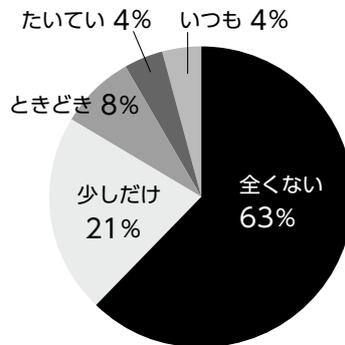
1. トラウマのアンケート (出来事衝撃度尺度)

「思い出させるものに近寄らない」
「感情がマヒしている」など22項目



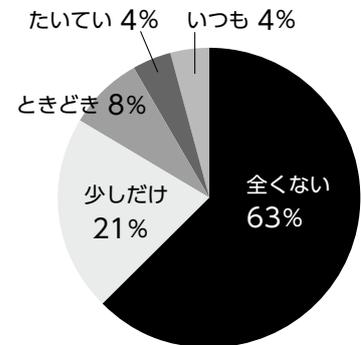
2. 抑うつ不安のアンケート

「絶望的だと感じましたか?」「抑うつに感じましたか?」など10項目



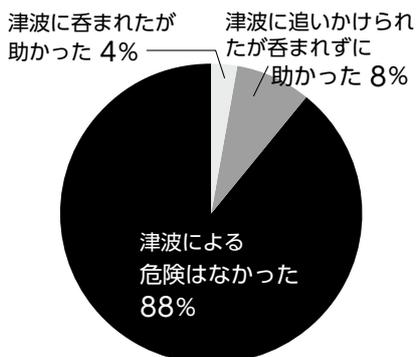
3. 心のケアのためのアンケート (過覚醒)

「なかなか眠れないことがある」
「集中できないことがある」など27項目



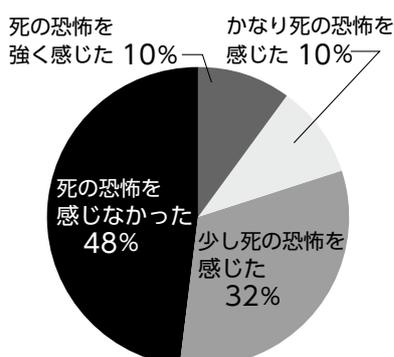
4. 被害状況

「あなたは津波に巻き込まれそうになりましたか?」

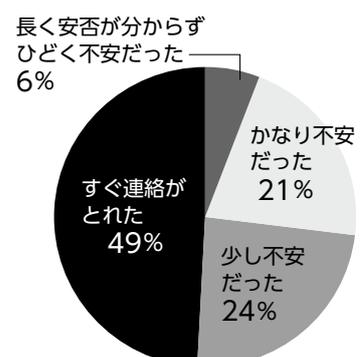


5. 被害にあったときの恐怖感

(1)「被害にあったとき」



(2)「家族の安否について」



1 その時、大学は

2 大学の被災状況

3 地震直後からの
大学の対応

4 地域社会への貢献

5 各学部・委員会
などの対応・動向

6 建物と地盤に
ついて

7 震災を振り返って

資料編

本学の被災状況

[建造物・備品]

本学の建造物は幸いにして阪神淡路大震災のような大規模な倒壊を免れた。また津波の直接波はもとより浸水による被害も受けなかった。しかし、後の検査により様々な被害が明らかになった。設備や実験機器等の備品は3月11日の本震だけでなく、4月7日の余震(M7.1、石巻の震度6強)においても被害を受けた。本震(M9.0)に比べて地震の規模は小さかったが、石巻地域の震度は同程度であり、また、地震の振動の周波数などが異なったため、新たに被害を生じた部分が認められた。しかし、二度の地震に見舞われたものの、建物本体は専門業者(鹿島建設(株))の検査の結果、赤紙(危険)、黄紙(要注意)を貼られるようなことはなく被害は皆無だった。本学の備品等の被害の概要は別表にまとめた。

各建物の被害

<1号館>

鉄筋コンクリート造 地上3階建て

平成元年3月竣工

理工学部教員の研究室や理工学部基礎理学科、情報電子工学科、そして生物生産工学科の実験室が設置されている1号館は、多くの実験機器が設置された建物で、3月11日には年度末の学会に備えて、実験を行っていた学生・教員も多く、稼働していた機器も多かった。データに示されたとおり、一部の床と壁にひび割れが認められたが、天井の崩落や窓ガラスの破損等は起こらなかった。1号館周辺の中庭の敷石はかなり褶曲していたが、建物自身の傾きは認められなかった。2階から本館へ通じる渡り廊下は目視により損傷が認められ、

震災後から長期にわたって利用できなくなった。ただしそれは後の専門業者のチェックにより大事には至っていないことが判明した。

地震に伴って大型機器の転倒などは報告されていなかったが、後の精査で一部の精密機器が地震動による衝撃や動揺により使用不能に陥ったことがわかった。

また、一部の研究室では書籍の落下があったもののその被害は軽微だった。研究室の入り口付近の本棚が傾き、外からドアを開けるのに難渋したとの話も伝えられているが、内部に閉じ込められるなどの被害はなかった。地震後、1号館に出入りするドアが対策本部により施錠され、さらに守衛の定期的な巡回により、不審者の侵入や毒劇物や高額実験機器等の窃盗事件は起こらなかった。

<2号館>

鉄筋コンクリート造 地上3階建て

平成元年3月竣工

主として講義室からなり、その他機械工学科の専門実験室、物理、化学および生物の学生実験室、および分析センターが置かれている。1号館と同様に周辺の地面に褶曲は認められたが、窓ガラス、天井および壁面はほぼ無傷だった。ただし、玄関の昇降部のスロープには10mm程度のずれが生じ、床面の一部に亀裂が認められた。

分析センター内の機器は地震による被害を受けた。たとえば、走査型電子顕微鏡は本体が15mm程度ずれ、固定していなかったコントローラー部は10cm以上移動していた。幸いにして定期保守の契約が結ばれていたため、業者による調整後、復旧した。また、核磁気共鳴装置(NMR)は地震の振動による転倒を免れ、結果として直接的な被害は軽微だった。しかし、長期にわたる停電によってクエンチの危険があり(クエンチとは液体窒素の供給が止まって昇温し超電導磁石の超電導状態が壊れること。急激な温度上昇で装置内部の液体ヘリウムが一気に蒸発して危険)、同室周辺を立ち入り禁止

区域にした。後日業者による検査の結果大事には至っていないことが判明し復旧した。東北大学(仙台市青葉区)や産業総合研究所(仙台市苦竹)において、それらの機器が一部転倒したと対照的な結果だった。安定同位体比測定用質量分析計は振動により分析部と磁石部が激しく接触し破損した。震災被害機器として、第3次補正予算により修理が行われることになった。

学生実験室では、ビュレットなどのガラス器具、架台などが実験棚上から落下し破損したが、戸棚、薬品庫は転倒を免れ火災発生もなかった。春期休暇期間中であり、学生たちによる大人数の実験中でなかったことが幸いだった。

<3号館>

鉄筋コンクリート造 地上2階建て

平成元年3月竣工

主として経営学部教員と一部の理工学部教員の研究室である。低層棟であることもあり建造物の被害はほとんど無かった。ただし、研究室内では書籍の散乱などが起こったとの報告がある。水の供給は最後までストップしなかった。これは給水タンクに相当の残量が確保されていたことと、春期休暇中で多数の教員が不在のため使用量が少なかったことによる。

地震後、3号館に出入りするドアが対策本部により完全施錠され、さらに守衛の定期的な巡回により不審者の侵入や窃盗等の事件は起きなかった。

<4号館> 鉄筋コンクリート造 地上3階建て

平成元年3月竣工

主として講義室からなる。外壁に一部剥落が認められたものの、建物にはほとんど損傷が無く、その後の避難所としての活用が可能となった。また4号館は講義室で占められていることから、転倒および落下するような物品がほとんどなく、物品の被害は講義室に設置されたスクリーンの破損にとどまった。

<5号館>

鉄筋コンクリート造 地上4階建て

平成12年9月竣工

講義室、学生ホール、情報教育研究センターからなるもともと新しい建物であったが、学内の建物としてもっとも高層であったこと、工法の違い、そして吹き抜けの学生ホールがあることなどが災いしたのか、建物としての被害はもっとも大きかった。3月11日の本震で天井や壁の剥落があり、教室ではプロジェクターやスピーカーが破損した。また3階の学生ホールでは天井照明の一部が外れ垂れ下がるなどの被害が出て、大津波警戒中に同所に避難していた学生・教職員は移動を余儀なくされた。ただしここでも窓ガラスの破損等はなかった。また、2階の情報教育研究センターでは、パソコンを耐震ジェルで固定するなどの震災対策を施していたため3月11日の本震では機器等の被害はなかったが、4月7日夜の余震により8台のパソコンがテーブルより落下した(第5章「各学部・委員会などの対応・動向 情報教育研究センター」P.118~を参照)。

<学生会館>

鉄筋コンクリート造 2階建て

平成元年3月竣工

学生食堂、教職員食堂、購買部からなる2階建ての建物である。学生食堂(1階)は広いホール構造だが、要所に円柱があり構造に損傷はなかった。ただし下水管に破損が見られた。

<体育館>

鉄筋コンクリート造 平屋建て

平成元年3月竣工

排気ダクトが破損したが、その他の大きな損傷はなかった。

<本館・図書館>

鉄筋コンクリート造 地上4階建て

平成元年3月竣工

建物の地震による被害は非常に軽微だった。そのため、本館は対策本部や学生・教員の避難所として機能した。一方、図書館は二度にわたる震度6強の揺れにより、書架の転倒が起これ大量の書籍が散乱した。詳細は図書館委員会の報告にあるが(第5章「各学部・委員会などの対応・動向 図書館委員会」P.106~を参照)、複数の書架がドミノ倒しのように倒れた。ただし、天井、壁、窓ガラスなどの被害はなかった。

<自動車工学センター>

鉄骨造 平屋建て

平成18年9月竣工

地盤沈下のため工作センターと自動車工学センターとのつなぎ目に亀裂が入ったが、機器等に被害はなかった。

<工作・試験センター>

鉄骨造 平屋建 2階建て

平成3年7月竣工

機械工作用の大型機械の設置された機械工作室、木工作室およびガラス工作室およびそれと隣接する試験センターなどからなる建物である。通路にひび割れを生じたが、それ以外の建物の被害は報告されていない。旋盤やボール盤等の重量物には被害がなかったが、試験センターの微小硬度計は台座から落下し破損した。

<雨天体育場>

鉄骨造垂鉛メッキ鋼板葺 平屋建て

平成16年1月竣工

大きな被害もなく、ボランティアセンターの資材置き場として活用された。

<バステル21>

平成9年竣工

設置当初はバス通勤・通学者のための待合所であったが、バス停留所の移動に伴い、待合所の役割を終了していた。被害はないが、一般避難者と一緒に避難してきたペット(屋外犬)の待機所として一時的に使用された。

<備品被害>

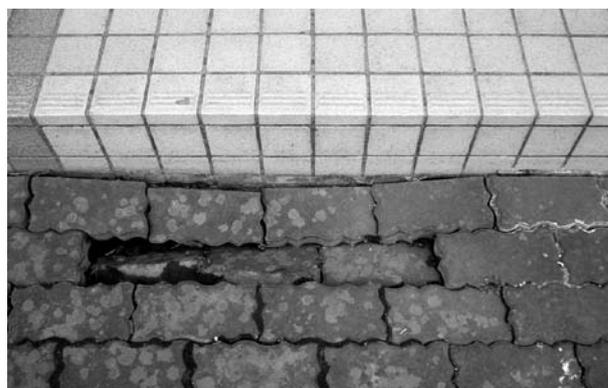
3月11日および4月7日の2つの震度6強の地震にともない、1号館および2号館内の多くの精密機器が使用不能に陥った。震災直後の目視では大きな被害は認められなかったが、その後いざ使用することになった際に劣化や能力低下が認められた。業者による検査の結果、多くの機器が修理不能の状態と分かり研究を遂行してゆく上で大きな障害となった。震災被害物品として第3次補正予算により新規購入が認められたが、被害機器数73台、被害総額は約2億3千万円(代替購入申請額)にのぼった(私学であるため国と大学がそれぞれ1/2を負担、ちなみに国立大学では2/3を国が負担)。平成24年1月に至ってもまだ機器の更新は行われておらず、教育・研究に支障を来している。

■ 本学の被災状況(備品・機器等)

被災建物	被災箇所	被災内容
実験室	実験機器63点	破損
図書館	書庫壁	破損
	書架・書庫	破損
1号館	床・壁	ひび割れ
4号館	外壁	一部剥落
	スクリーン	破損
5号館	天井・壁	一部剥落
	プロジェクター・ スピーカー	破損
体育館	排気ダクト	破損
工作・試験センター	通路	ひび割れ
自動車工学センター	通路床	ひび割れ
学生会館	下水管	破損
//	天井・柱	ひび割れ
グラウンド	照明機器	破損
その他	空調吹出し口	一部落下
//	渡り廊下	一部破損
//	インターロッキング	沈下
//	浮き桟橋	破損



ヒビの入った壁(5号館4階のカフェテリア)



インターロッキングの沈下

1 その時、大学は

2 大学の被災状況

3 地震直後からの大学の対応

4 地域社会への貢献

5 各学部・委員会などの対応・動向

6 建物と地盤について

7 震災を振り返って

資料編

本学の被災状況

[避難の詳細]

震災当時は春期休暇中だったため、地震発生時に構内にいた学生は多くなかったが、職員および理工系の教員・学生および部活動・サークル活動の学生を中心に200人程度が大学にいた。幸いにして全員が無事に避難した。避難者は、仙台方面から通勤する教員が鉄道の不通と道路事情の不明確さから帰宅難民となったもの、そして地元に住居する学生や教職員の自宅の流失被害や浸水、あるいは停電・断水などのライフラインの断絶による避難に分けられる。

帰宅困難者

本学学生および教員は通勤通学にJR仙石線を利用するものが多く、仙台からの通学支援バス(ミヤコーバス)利用者も含めると相当数に及ぶ。これらの学生・教員が帰宅難民となった。また、仙台方面から自動車通勤していた教員も、三陸道の不通と一般道の冠水による通行止めなどによって帰宅ルートを絶たれた。12日に至り、仙台方面から来た新聞記者らの情報を元に小牛田、鹿島台方面から仙台に抜けるルートが走行可能ということが知られるようになってきたが、ガソリン事情の逼迫から帰宅をためらう教員も多かった。また、学生は実家の状況から大学にとどまる学生もいたようだ。中には山形まで自動車に分乗し、その後タクシーで日本海側まで出て鉄道で関東方面に帰った教員もいた。

自宅のライフライン断絶による避難者

津波被害、また、冠水やライフライン断絶で自宅では

生活できない教職員・学生も多かった。さらに、一旦、近隣の避難所に避難した教職員・学生が食料・電気・情報を求めて大学の避難所にやってきたことから、避難者の数は増加した。一方、県外の学生は保護者や近隣の親戚が自動車ですべてを迎えにくるなどして帰宅の途についたが、自宅が被災した学生や教職員は大学の本館で長く避難生活を送ることになった。最終的には避難所が閉鎖になった4月28日まで4人の学生や教職員が避難生活を送っていた。

食糧事情

11日夜と12日に備蓄されていた缶入りのパンが配られた。また当初は本館1Fの自販機コーナーのカップ麺や清涼飲料などが残っていたこともあり、食事に困ることはなかった。ただし、近隣の住民や一般の避難者が増えてきたころから、それらは次々にsold outになった。卒業研究直後で研究室内にカップ麺などを備蓄していた教員や学生が多かったことから避難していた教職員や学生はその後もしばらく持ちこたえることができた。またホワイトデーのクッキーなども食料になった。早朝からスーパーに行列して買い出しを行った学生・教員もあり、スナック菓子などが中心だったが空腹をしのぐことができた。一旦登米の実家に帰り、たくさんのおにぎりを持って来校した学生もいた。13日頃になると、炊き出しやサツマイモ、バナナの配給などが始まり空腹を感じることはなくなった。

避難所の環境

避難所となった本館2階では非常用電源のおかげで100Vの電源を利用することができたため、携帯の充電(実質上通話はできなかったが)、湯沸かし等が可能だった。ただし、省エネルギーのため消灯時間は早く、夜間も階段以外を消灯した。室内のトイレは使用禁止とし、屋外の仮設トイレを利用することになった。設置台

数が少なく処理も困難だったため男子の利用を制限したほどである(4号館裏の芝生上に幻の男子トイレが出現、さすがに利用がはばかられ半日で消滅)。

一般の方と学生が避難している場所は別にした。大学が第一に守らなければならないのは学生であり、彼らが無事に親元に届けなければならない義務があるからである。誤解を恐れずに言えば、避難者の方を受け入れはしたが、一般の避難者のお世話を行うのは本来自治体の仕事である。だが、実際には、一般避難者担当の石巻市職員が当初数人しか派遣されなかったこともあり、教職員だけでなく学生たちも可能な限り一般避難者のお手伝いをするようになった。以前、大学に勤めていた方がたまたま大学に避難されてきたが、後日、大学に足を運んでくださり、「大学があって助かりました」という言葉を頂いた。また街でお会いしても、深々と頭を下げてくださった。嬉しいかぎりである。

■本学の被災状況(避難者)

避難者	人数(ピーク時)
学 生	200人超
教職員	50人超



炊き出しに列をなす避難者



NTTより設置された非常用衛星電話

1 その時、大学は

2 大学の被災状況

3 地震直後からの大学の対応

4 地域社会への貢献

5 各学部・委員会などの対応・動向

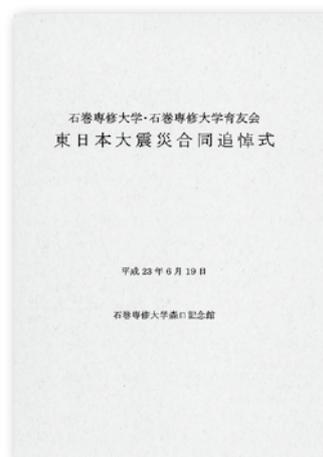
6 建物と地盤について

7 震災を振り返って

資料編

「石巻専修大学・石巻専修大学育友会 東日本大震災合同追悼式」の実施について

平成23年6月19日(日)晴天の下、森口記念館を会場として「石巻専修大学・石巻専修大学育友会東日本大震災合同追悼式」がしめやかに執り行われた。当日は10時30分に開式され、ご遺族3家族6人、石巻専修大学坂田隆学長、学校法人専修大学日高義博理事長、育友会大河原惇会長、同窓会伊東孝浩会長、そして学生会大木章夫会長が登壇した。会場には育友会会員の父母、学生、教職員合わせて約150人が参列。震災で尊い命を亡くした学生7人(新入学予定学生1人含)、父母8人、同窓会員1人(平成23年6月19日時点の判明者)、合計16人を慰霊した。



式辞で坂田学長は、亡くなった16人を悼み、「様々な将来を夢見て大学生活を過ごしていた若者や楽しい大学生活を間近に控えた若者がなんの予告もなく生涯を閉じざるを得なかった無念さを思うとやり切れないものがあります。私たち教職員は、いつでも学生諸君の話し相手になります。在学中もちろん、卒業してからも、つらいときにも、嬉しいときにも大学に話にきて欲しいと考えています。石巻専修大学では被災地域とともに復興を進める「復興共生プロジェクト」を始めました。災害に強い地域作りや、復興のための情報ネットワーク作り、小規模集落のためのサバイバルプラントの開発など、被災地にある大学にしかできないことをしようとしています。亡くなられた皆さん、どうか私たちの努力を見守って下さい。」と今後の残された遺族に対する支援、被災地大学としての復興活動の推進を誓った。続いて日高理事長、大河原会長、伊東会長、そして学生を代表して大木会長が別れの言葉を述べ、その後ご遺族を代表して笹谷由夫様、佐藤千昌様からお言葉を頂戴した。最後に参列者全員による献花を行い、11時30分に閉式した。会場の森口記念館の出口付近では、ゼミナール・クラス担当教員や、同級生・サークル仲間から、亡くなった学生の在りし日の様子を偲ぶ話が親御さんに伝えられ、悲しみを誘うと同時に、恩師や級友の温かい言葉、心遣いに感謝している様子だった。

